

《CONFESSION DE PÉCHÉ》

鶴岡賀雄

田丸先生がもう御退官するのか——というのが私の実感である。本郷に進学した春、今と同じように雑然とした研究室でのオリエンテーションの席で初めて先生を見た、そして“この先生が私の「指導教授」になるのかな”と思った（そして実際にそうなった）のが、数えれば早、17年前のこ

とである。その時の先生のお顔は今も覚えているが、それは定年を迎えられた現在の先生のお顔と、私の印象の中ではまったく変わっていない。私には先生は、かくも「不変の人」であり続けている。

さて、そうした先生についての思い、思い出は当然いろいろあるが、ここには敢えて、私のお詫

びを書かせていただく。私は1985年4月より研究室の助手をさせていただいた。そして幸運にも、勿論これも田丸先生の御尽力で、僅か一年で現在奉職する大学に転出することができた。その僅か一年の間に、私は殆ど取り返しのつかない失態を演じてしまったのである。『宗教研究』の刊行助成金申請の書類を文部省に提出するのを、すっかり忘れてしまったのである。その結果、翌86年度は、それまで毎年113万円あった刊行助成がゼロとなり、87年度から何とか復活したものの助成額は約40万円と大きく減額されてしまった。私のミスによって、日本宗教学会の全体に、毎年70万円余、つまりは私には償いようもない損失を与えてしまったのである。しかもこのミスに気がついたのは私が既に職場を転じた翌年度になってからであった。だから、この大失態の事後処理は、後任助手の浜田君、そして誰よりも、研究室の主任教授であられ、当時宗教学会会長でもあった田丸先生（同年秋よりは脇本先生）が当たられたのである。現場を離れてしまった私は直接は知ることはなかったが、文部省に対し、また学会理事会等に対し、責任感の人一倍強く学会を愛すること誰より深い先生がいかに身心を労わされ、辛い対応に奔走されたかを伝聞するとき、私は誠に、文字通りお詫びの言葉がない。しかも先生は、通常の営利団体ならば相当な譴責、懲罰があって然るべきこのミスに対して、私を責めることが全くと言ってよいほどなかったのである。

とはいえ、学会に対し、つまり全学会員に対して与えてしまった経済的損失は、私には如何ともし難い。償いようのない罪は、「我に罪あり *je suis coupable*」と告白して赦しを乞う他はない。場違いかとは思ったが、田丸先生に対する私の思いを述べるとあっては、やはりこの事に触れないではいられなかった。せめてこの場を借りて、私の過失を告白し、併せて全学会員にお詫びさせていただきたい。

この事も含めてだが、私は改めて、田丸先生には余りに甘えてきた、との感が深い。私の指導教官は先述のとおりずっと田丸先生であったが、私は必ずしも、先生の学問の中心である宗教学の哲

学的、学問論的基礎づけを自分の勉強の真剣な対象にはしてこなかった。寧ろ勝手な興味の赴くままに、自己流・無手勝流の勉強をしてきた。これは今思えば、先生への甘えでもあった。つまり、「宗教学」の本質規定、方法論的根拠づけといった面倒な思考は先生に任せておけばいい、私はもっと面白そうな分野に出て行きたい、という態度である。大切、不可欠だが面倒で地味で地道な仕事は、先生に任せてしまおう、という訳である。しかも田丸先生には、「先生に任せておけば大丈夫」と人に思わせるところが確かにある。銃後の守りがしっかりしていると思えばこそ、気儘なゲリラも勝手な方向に出撃できる。が、これは「甘え」に他なるまい。先生はしかしそれを積極的に許されていた。そして自らは、東大の宗教学科という集団各員の勝手に危なげな彷徨を支える基点であり、基準であり、定点であった。「宗教学」のホーム・ベースを守るキャッチャーとも言えようか。

こうした位置づけを先生御自身が自ら肯んじられるかどうかはわからないが、少なくとも私には、先生の学問の、また研究室、牽いては学会内での位置はこうしたものであった。先生のおられる位置からの逸脱度が即ち、自分の学問——と言えるほどのものがあるわけではないが——の特性のように感じていた。大した放蕩も出来ないでいるが、やはり私は先生の不肖の放蕩息子の一人であると思いたい。そしてその息子は、未だ帰還の道筋も見つからずにいるが、このごろはしかし随分「里心」もついてきた気がする。やはり学問に基礎づけは必要なのである。

東大から移られても、先生は今後も、私にとっては「不変の人」の印象を与えてくれるであろうか。或いは別天地に行かれて、大きな変貌を遂げられるのだろうか。そして私は、その先生のおられる場所に、どうしたら帰還できるのだろうか。